
絆

○シュン○

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絆

【Nコード】
N7830C

【作者名】
○シユン○

【あらすじ】
これは俺とダチとの絆の物語。永遠に忘れられないストーリー

プロローグ（前書き）

初投稿です

気ままに書きたいと思います

プロローグ

皆はダチとの絆ってどう思う？ 今どきそんなんださい？ くさいセリフ？

でもどう言われても俺はそれでもダチとの絆って信じたい
だって俺には最高のダチがいるから

タバコタイム

「フゥ」

暑い太陽の光が射す屋上で今俺はタバコを吸ってる。

あつ、俺？ 悪イ悪イ。

俺の名前は武田俊哉、仁政高校の1年生。

今は2限の途中なんだけどめんどくて屋上で一服中。

ボタン！！

その時いきなり屋上のドアがあいた。

黒髪をツンツンに立てたガタイのいいやつがこっちに向かってくる。

「俊弥！」

「オウ、翔か」

こいつは村松 翔。俺のダチ、最初はこんな仲良くなるとは思ってなかったけどな

「あつ、ライター忘れた！ 悪イけど火イ貸してくんね？」

「オウ」

俺はポケットにあるジッポを翔に投げて渡してやる。

翔はくわえてたタバコに火をつける。

「フゥ、やっぱ授業ふけて吸うタバコは最高だな」

「お前いつも同じセリフじゃん」

「確かに！」翔は笑いながら鼻から煙を出してる

二人は下らない話をして時間を潰していた

「そーいやお前覚えてる？入学して俺と喧嘩した時の事」

翔が何気なく聞いてきた

「フゥ、まだ2ヶ月しかたっていないべ。忘れる方がおかしいだろ」

俺はタバコの煙を吐きながら答える

「だよな、あんときはお前ホントひどかったよな！全然容赦しないしよ」

「俺だって顔ボコボコだったじゃねえかよ」

「俺なんてあのあと帰り道で色んな子供に顔見られては泣かれて見られては泣かれての繰り返しだったんだからな！」

「それは翔の顔がもともと恐いからだよ」

二人は話しながら2ヶ月前の事を思い出す

そう二人が出会ったあの日の事を。

初登校

4月10日。

俺は仁政高校の入学式をサボっていたのでこの日が初登校になる。

「ダリーなー」

そんな独り言を言いながら俺はタバコに火をつけてブラブラと歩き始める。

ちなみに仁政高校は最寄りの駅から歩いて20分位はかかる結構駅から遠い学校なのだ。なのでこの辺でタバコ吸っててもバレないだろうと思う俺はタバコを吸っていた。

「やっと学校着いたよ、ったく遠すぎんだよ」
ぶつくさと文句を言いながら俺はタバコの火を消して学校に入っていく。

下駄箱で中学から履いていたかかとがボロボロの上履きに履き替え教室に向かう。
時刻は既に11時をまわっていた、多分3限の途中だろうとか思いながら俺は教室に入る。

ドアをあけるとガンくれてくる奴と勉強に夢中なのか全く気にしない奴がいる。

仁政高校は都立でも中間校なので真面目な奴が多い。

「おはよー先生、俺の席どこっすか？」

「武田、無断欠席に遅刻とは良い度胸だな、次からは気をつけろよ」
「はーい」

俺は適当に流してガンくれてくる奴など全く気にせず教えられた席に座る。

そして俺は窓から差し込む太陽の光が暖かくて気持ちがいいので座った瞬間に寝てしまった。

チャイムが鳴り、起きたら6限の体育の時間になっていた俺はダルかったのでタバコでも吸うかと思いきや屋上に向かった。

ドアを開けたらそこには昼間ガンくれていた奴が二人でタバコを吸っていた

「あいつだよあいつ！遅れてきて偉そうにしてたやつ！」

金色の髪を肩まで伸ばした奴がいきなり俺に指指して言った。

「あーあいつが調子乗ってるって奴か」

茶髪の男が金髪に相づちをうつ

「はあ？お前誰だし、訳わかんねえ事いってんじゃねえよ」
俺は寝起きなのもあって少しイラついていた。

「ウザッ、こいつシメようぜ」

「賛／＼成」

金髪と茶髪がいきなり殴りかかってきた

自慢じゃないが俺は昔から喧嘩ばっかしてきたのでこーゆー事には慣れている。

距離をとり金髪が殴ってくるパンチを避けながらカウンター気味に思いつきり右の拳を叩き込む
金髪は吹っ飛んだ

「つ、強え」

それを見ていた茶髪は

「テメェ覚えてろよ!」とか言いながら金髪をつれて逃げていった

「フゥ」

一服して落ち着いた俺はその日はそのまま家に帰った。

出会い

4月16日

今日も俺はダラダラと歩きながら学校に向かっていた

「おはよう」

「オウ」

クラスメイトに挨拶され短く挨拶を返す

あの日以来喧嘩などせずに平穏にくらしてきた俺は何人かのクラスメイトと話すようになっていた

「そーいや武田君が前に喧嘩した相手いたじゃん？あの人達が何か武田君をボコるとか噂たってるから気をつけなね」

クラスメイトが忠告してくれた、どこでそんな情報得るのやら

「サンキュー、とりあえずは気をつけるよ」

俺は適当に返事をして教室に入る

その時、

「ちょっと待てよ」と金髪が話しかけてきた

「何？」

「お前に用があるって人がいるからちょっとこいよ」

俺はめんどろだったのがクラスメイトに迷惑かける訳にもいかず金髪

の後についていった

つれていかれた先は屋上

そこには黒髪をツンツンに立てているガタイのいいやつがいた

「お前が武田か？」

黒髪が話しかけてくる

「ああ、で、あんたは？」

「俺は村松、こいつらがお前にいきなり殴られたと泣きついてきてよ、俺の兄貴のチームに入ってる奴だからほっとけなくてな」

「はあ？ そいつ等が先に喧嘩売ってきたんだぜ？」

「そんなんどっちでもいいんだけどよ、俺はお前と喧嘩したいだけなんだからな、今日の放課後にまた屋上にこいよ」

「わかったよ」

それだけ言うと村松は屋上から出ていった

残った俺は屋上で一人でタバコを吸ってそのまま放課後まで寝る事にした

喧嘩

4月16日 放課後

「ふわぁ〜」

俺は大きなあくびを一つつき、背伸びをして体の調子を整える

時計を見るとちょうどその日の授業が終わる時間だった

皆は今から遊びいったりすんのかな、などと思いつつ俺はデートの約束をした相手を待っていた

ボタン！！

ドアが開きそちらを見ると俺のデート相手がたっていた

「はええな、もうきてたんか」

村松が言う

「ああ、俺もお前と早くデートしたくて待ちきれなくてよ」

久々の喧嘩だからなのか季節のせいなのか、俺は少し好戦的になっていた

「いい度胸だ、なら早速始めるか！！」

村松が構える、見た感じは柔道でもやってそうな感じだ
対して俺はいつもの構え、右手を前にだし相手との距離をとりながらのカウンタースタイル

「うらゝ!!!」

村松が叫びながら掴みかかってくる

俺はとっさに左によけ、よけざまに一発、腹にパンチを入れた

だが村松は全くひるまずに俺に掴みかかってくる

そして俺は襟を捕まれ村松に投げ飛ばされた

ドカツ!!

「ぐはっ」

屋上の硬いコンクリートの上に思いっきり投げ飛ばされた俺は少し呼吸ができなくなった

村松は続けざまに俺に馬乗りになり次々と顔面にパンチを繰り出していく

俺は意識を途切らせないよう集中して村松のパンチを受けていた

一発一発が重く何度も意識が飛びそうになったが何とかこらえ、チャンスを伺う

そしてチャンスがやってきた、村松が疲れたのかパンチの嵐がやんだのだ

俺はすかさず村松の顔面を下から殴り、相手が怯んだ隙に腹に蹴りをいれた

俺は立ち上がり村松と距離をとる

明らかに俺の方がダメージが大きい

長引くと不利だと思い村松の突進に合わせたカウンターを狙う

痺れを切らした村松がまたもや凄い勢いで突進してくる

「うおー!!!」

俺は避けずにギリギリまで村松を引き付ける

そして村松が膝をタックルしようとした瞬間

バキッ!!!

鈍い音が響く

俺は村松の顔面に膝蹴りをいれた

村松はよろめき何が起きたかわかっていない

「うらー!!!」

俺は村松の顔面にダメ押し of 右ストレートを叩き込む

「ぐはっ」

村松が倒れた

「ハア、ハア、もうこれでいいだろ」俺が村松に言う

「ああ。十分だ」

俺はポケットからタバコを出し火をつけ深く吸い込み肺いっぱい煙をいれ吐き出す

「お前も吸う？」

「一本くれ」村松にタバコとライターを渡してやる

「お前ジッポじゃねえのかよ、ダセェな」とか文句言いながらも村松はタバコに火をつけ、煙を深く吸い込みそして吐き出す

「口ん中切れてていてえんだけど」俺がタバコの煙を吐きながら村松に言う

「俺も同じだからきにすんな」

村松はニカッと笑いながらそう答えた

「まあいいけどよ」

「そーいや下の名前なんてーの？」

「俊弥」

「なら今度から俊弥って呼ぶわー！！喧嘩して終わったらダチだべよ」

「お前の名前は？」

「翔」

「なら俺も翔って呼ぶわ」

「オウ！ってかハイライト不味いからマルメン吸えよ」

「俺はメンソ嫌いだからよ、ってかハイライトうめえし！」

そのあと俺達は下らない話をしながら家に帰っていった
それが俺と翔との出会いだ

バイト

「單車欲しくね？」

「欲しい！」

「けど金ねえよな」

そんな何気無い会話をしながら今日も俺と翔は学校の屋上でタバコを吸っていた

だがこの日は少し違った

「バイトすんべよ！」

翔がいきなりそんな事を言い出した

「それもいいけど良い場所ある？」

俺は煙を吐きながら聞く

「ウチの近くの單車屋がバイト募集しててよ！二人で働けるか聞いてみようぜ」

それは良いアイデアだと思い早速電話した

プルルプルル

「はい、サンダーボルトの片山です」

「バイト募集のチラシみて電話したんすけど、ダチと二人で働けますか？」

「働いてくれんの！？いやーこんな早く見付かるとは思ってたよ、二人？全然いいよ！多ければ多い程いいからさ」

「ホントっすか！？ありがとうございます！」

「なら明日から店きてくんない？ウチ面接とかないからさ」

「わかりました！」

「んじゃよろしくね、あっ名前は？」

「俊哉と翔です」

「あいよ、んじゃ明日ね」

そして電話は切れた

「明日からいきなり働けるってよ、面接もなし！」

俺は笑いながら翔に言う

「マジか！最高じゃん」

そして二人は何のバイクを買うかの話をしはじめた

「絶対FXがいいべよ、RZ250とかさ。やっぱ旧車だべ！」

翔は前から旧車が良いと言っていた

「俺はアメリカンかな、ステイードとかドラスタとかさ」

俺は断然アメリカンだ

「はあ、やっぱ男なら旧車だろ」

「アメリカン」

「旧車！」

そんな話をしながら一日が過ぎていく。

バイト初日

「緊張するな」

翔が柄にも無いことをいっている

「面接ないんだしスゲー余裕じゃん」

俺は素っ気なく答える

今日は記念すべきバイト初日なのだ

「超恐い店長とかだったらどする？」

「電話で話した感じ良い人だったよ」

俺等はタバコを吸いながらサンダーボルトに向かっていた

「よっしゃ、行くか！」

翔が気合いをいれた

そして俺等は店の前にたった

「すいませーん、昨日電話した俊哉です」

「オウ入れ入れ」

店の奥から声が響いてきた入ると中にはたくさんのおいてあった
アメリカンと旧車が多い気がする

「これバルカンじゃん!」

「あっちにはフォアだし!」

俺等のテンションは上がってしょうがなかった

「とりあえずその辺座れよ」

奥から真っ黒な髪の毛を一つにしばった男が出てきた

「俺はサンダーボルト店長の片山 聖治、聖治さんってよんでくれ」

「俺は武田俊弥っていいいます、よろしくお願いします」

「俺は村松翔です、迷惑とかかけるかもしれないですがよろしくお願いします」

「俊哉に翔だな、よっしゃ! 今日からよろしくな。従業員は俺とお前等だけだから」

「えっ!!!??」

「えっ!!!??」

俺等は驚きすぎて声が裏返っていた

「まあそんな気負わなくてもゆっくり覚えていけばいいよ!」

聖治さんはにっこり笑いながらそう言った「大丈夫かあ?」

翔が小声で俺に訪ねた

「まあなんとかなんべ」

「とりあえずツナギやるから着替えろよ」

聖治さんのツナギを借りて仕事を教えてもらう

何から何まで初めての事なので楽しくてしょうがない、翔も俺と同じで楽しいようだ

そんなこんなで時間が過ぎていき夜の9時になっていた

「ほらっ」

俺と翔に聖治さんから缶コーヒーを渡された

「今日は初日だったのによく頑張ってくれたな。俺の奢りだ、飲みな」

「あざーす」

「ありがとうございます」

疲れた体にコーヒーが染みる

「聖治さん、タバコ吸っていいっすか？」

俺は思い切って尋ねてみた

「いいよ、俺も高校生から吸ってたからよ」

俺と翔は頭を下げて礼してから一服させてもらった

「うめえ」

翔がとても嬉しそうタバコを吸っている

俺も肺に煙をいれて味わってから吐き出す

「ホントにウメエな」

「働いた後の一服はうめえよな」聖治さんが話しかけてきた

「お前等いい線いってるよ、明日からもよろしくな！」

「俺等こそよろしくお願いします!!」「」

二人は声を揃えて挨拶した

そして二人のバイト初日は終わったのだ

とある一日

7月18日

「ハア」

俺は大きなあくびをしながらベッドから起きた

とりあえずはおきぬけの一服。これがまたうまいんだわ

ちなみに俺は一人暮らしをしているので誰もいない、タバコを消して風呂場に行き少し冷たいシャワーを浴びてから、パンツ一丁のまま冷蔵庫へ向かう

「なんもねえじゃん」

最近バイトばかりいつていたので買い物に行くのを忘れていた

ピンポーン

チャイムが鳴る

「誰だ、こんな朝早くから」

ピンポーン

またチャイムが鳴る

「せっかちな奴だな」

俺は文句言いながらもドアを開ける

「オウ、悪イな朝から」

「翔！？いきなりどした？」
そこには翔がいた

「まあとりあえず上がれよ、散らかつてるけどさ」

「サンキュー」

翔は部屋にあがるなり俺の物を物色し始めた

「このDVD俺も見なかったんだよ、貸してくんね？」
「別にいいよ」

「お前AVとかねえのかよ」

「ラックに入ってるよ」

「初耳だし！見せろ！」

朝っぱらからこんなバカ話もいいなとか思いながら俺はタバコを吸う

「んで、お前何しにきたん？」俺は翔に尋ねる

「いや、暇だからきただけ。ってかコンビニでメシ買ってきたから一緒に食おうぜ」

「マジ！？俺の分も？」

「もちろん」「サンキュー！！」

俺はいつもは見せないような笑顔で翔に礼を言う

「気持ち悪ィよ、朝メシ位で」
翔は少し引いていた

「ま、まあとりあえず食おうぜ」翔が弁当を渡してくれた

「「いただきます」」

腹を満たした俺等は翔が見たがってたDVDを見ながらタバコを吸う

「このあとこいつがさ」

「てめゝ続き言ったら殺す」

俺は翔を茶化しながら笑っていた

「とりあえず学校向かうべ」

DVDも見終わりヒマになった二人は学校に行くことにした

「電車で行くか？」

「天気もいいし歩いていくべ」

俺の家から学校までは歩いてても1時間位なので歩く事にした。電車使っても駅から歩くしかわんねえけどな

俺等はブラブラしながら学校へ向かう

「そーいやE組のなんとかって女可愛くね？」

翔が聞いてくる

「なんとかじゃワカンネエよ」

「ならC組のなんとかは？」

「だから何とかじゃワカンネエだろ」

俺等も年頃の男なので女に興味はもちろんある、ただ彼女とかはまだいらねえって感じ

遊ぼうと思えばいくらでも遊べるしな

そんなこんなで学校に着くととりあえずは屋上へ行く

そして一服した俺等は教室に向かう

「んじゃまた帰りな」

「オウ」

5限には間に合い教室に入る

俺がC組で翔がF組だ

「おはよー先生」

ちょうど担任の授業だった

「また武田は遅刻か、真面目に学校こいよ」

「明日からね先生」

俺は出来るだけ可愛く言ったがものの見事にシカトされた

ふてくされた俺は席に座るなり眠かったので寝た

キーンコーンカーンコーンチャイムの音で俺は起きた

「今何限終わる？」

隣の女に聞いてみる

「今6限終わったばかりよ」

「サンキュー、ハア」

俺は礼を言いながらアクビした

そして翔のクラスに行き、

「バイト行くべ」

「ハア」オウ

多分こいつも寝てたのだろう、デコが赤い

そして俺等はバイトに行き単車の整備などする

「今日はもうあがっていいぞ、お疲れさん」

「お疲れさまっす」

「お疲れッス」

そして俺等はそれぞれ家に帰っていた

「また明日な」

「お疲れ」

俺は家につくなりタバコを吸いながら何か飲もうと思いい冷蔵庫を開ける

「結局買い物行っただけだ！」

俺は明日こそ買い物行かなきゃとか思いつつ眠りについた

翼を手に入れた日

7月24日

「今日もお疲れさん、はい、バイト代」

「「あざーす!!」」

俺等二人は聖治さんからバイト代を受け取る

「そーいやお前等、そろそろ単車買えんじゃね?何か欲しいのあんの?」

聖治さんが聞いてくる

「俺はここで色々見ていくうちにバルカンがいいかなって思いました」

俺はやっぱりアメリカンしかないと思っていた。

「やっぱFXっす!っていいたいんすけど高いんでZRXに決めました」

翔は旧車には手が出ないんで現行車をいじることに決めたらしい

「ZRXにバルカンか、両方ウチの店にあんだろ。よっしゃ!お前等はよく頑張ってくれるし、それぞれ10万で売ってやるよ」

「えっ!?!」

「マジっすか？」

俺と翔は聖治さんの顔を見ながら尋ねた

「そんなかわしこれからも働いてくれよな」

「頑張ります！」

「ありがとうございます」

聖治さんにお礼を言う

「俺が責任もって整備してやつからちよっと待ってろ」

「そんな悪イですよ、俺自分でやります」

「俺もっすよ！」

「いいんだよ、俺はお前等の事弟みたいに思ってたんだからよ。きにするな！ってか今日泊まっていけよ、明日休みだろ？」

「はい！」

「じゃあ今日は徹夜で整備して、んで飲むぞ」

「「はいっす！」」

そして俺等は聖治さんと三人でバルカンとZRXの整備をした

「よし終わった」

時刻は2時をまわっていた

「ホントありがとうございます」

「こんな早く単車が乗れるなんて思ってもみませんでした」

「いいよいいよ、んじゃ飲むか!!」

そして俺等は三人で朝方まで飲み続けた

終業式

7月25日

この日は仁政高校の終業式、俺と翔は朝方まで聖治さんと飲んでた
せいで頭が痛い
が、肝心の聖治さんが見当たらない

「今、何時？」

「9時」

俺が眠い目をこすりながら答える

「終業式とする？」

「ふけんべ」

俺等に行かない事にした

「終業式位は出てこいよ」

「えっ？」

「あっ、おはよーございます聖治さん」

「おはよー」

そこには聖治さんがいた

「ほらっ」

聖治さんが俺と翔に何かを投げた

それをキャッチして見てみると手の中に鈍い色を放つ一本の鍵があった

「こ、これって」

わかってはいるが嬉しさのあまりに確認してしまう

「お前等二人の単車のキーだよ、単車でいきや10分前からねえだろ。ガスはいれてきたし、最終確認を今してきたからよ」

聖治さんは朝から単車の調整をしていたのだった

「何から何までホントすいません!!」

「いいいいいよ、俊哉と翔は俺の弟みたいなもんだからって何回言わすんだよ」

聖治さんが照れていた

それをみた俺と翔は少し嬉しくなった

「じゃーいってきます」

「いってきますす!」

「オウ、今日は店休みにするからお前等遊びにでもいってきな、俺は眠いから寝る。気をつけろよ」

これも聖治さんの気遣いの一つであろう、ありがたく今日は休みを

もらうことにした

キーを入れ、セルスイッチを押してすぐにアクセルを軽く捻る

ドゥーン！ドウドウドウドウマフラーからでる低い排気音

単車に命が吹き込まれるような気がした

翔もエンジンをつけた

そして俺等は学校に向けて単車を走り出す

「スゲー気持ちよくな！？」

翔が隣を走りながらでかい声で聞いてくる

「ああ！！イッチまいそうだな！」俺も負けじとでかい声で答えるそして10分もかからずに学校についた

「俊哉とばしすぎだから」

「お前と対して変わんねえよ」

単車を学校前に置いて急いで体育館に向かう

何とか見付からずに合流できた

校長の長い話を聞き、教室に戻って成績表を受け取る

「今日はこれで解散、夏休みが終わったらまた会おう」

「さよなら」

そしてHRが終わり合流した二人はこのあとどうするかを話していた

「どこいく？」

「もちろんドライブだべ」

「だから場所だよ！ドライブ行くのは当たり前」

「んゝ海、見に行かね？」

翔の提案に俺はのることにした

「よっしゃ！海向かうか」

そして学校の前でバルカンとZRXに命を吹き込む

「どっちが速いか競争な！負けたらジュース奢りで」

「その賭け乗った！」

俺等はアクセルをふかしながらは意気揚々と海へ向かっていた

そしてそれを面白くないように見ている2年と3年がいる

「あいつ等、調子乗りすぎなんじゃね？」

「いっぺんシメなきゃダメっしょー！！」

「ホントホント、この前なんて私にガンたれてきたかんね」

「ああ、夏終わったらシメるか。他の2年にもいっとけ」

「」「オウ」

「了く解く」

これが後に地獄の7日間と呼ばれる事件に発展していくがそれはまだ先の話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7830c/>

絆

2010年10月19日23時53分発行